2020 年 12 月 20 日（日）「クリスマスに思い起こすこと」

讃美歌 94 番

１．
久しく待ちにし　主よ疾く来りて
御民の縄目を　解き放ち給え
主よ主よ　御民を　救わせ給えや

２．
朝の星なる　主よ疾く来りて
小暗きこの世に　御光を給え
主よ主よ　御民を　救わせ給えや

３．
ダビデの裔なる　主よ疾く来りて
平和の花咲く　国を建て給え
主よ主よ　御民を　救わせ給えや

４．
力の君なる　主よ疾く来りて
輝く御座に　永遠に即き給え
主よ主よ　御民を　救わせ給えや

クリスマスおめでとうございます。昨日のキャンドルサービスに引き続き、皆様とともにクリスマスをお祝いできますことを、心から嬉しく思っております。オンラインでご視聴くださっている皆様とも思いを一つにして、この時間を過ごしたいと思います。今日は礼拝後、12 時からオンラインでのクリスマス祝会も予定しておりますので、そちらにも是非ご参加ください。

さて、私は神学生時代（23 歳くらい）から毎年クリスマスのメッセージを担当させていただいてきましたが、聖書の中のクリスマス関連の記事というのは実はあまり多くないもので、マタイ福音書とルカ福音書の降誕物語は二巡してしまいました。それ以外にも旧約預言書からたびたび語ってきましたが、預言書の性質上どうしても複雑な内容になりがちでした。そこで、今年は試しに讃美歌の解説をメッセージにしてみたいと思います。これはただの思いつきというわけではなく、神学校の音楽科に在籍していた頃、何度か課題として取り組んだことがあり、いつか教会で実現できたらいいなと長年心の片隅に置いておりました。今日は私のオリジナルのやり方になりますが、讃美歌 94 番の各節を解説したところで、会衆の皆様と一緒にその節を歌うということをやってみたいと思います。歌詞の意味内容を理解し、メロディーとともにそれを味わってみてはどうかと考えています。

１.

久しく待ちにし　主よ疾く来りて
御民の縄目を　解き放ち給え
主よ主よ　御民を　救わせ給えや

「**久しく待ちにし**」とは、「もう長い間待ち望んできた」という意味ですね。誰が何を待ち望んできたのか。救い主の到来を約束されていたイスラエル民族です。イスラエル民族は、その民族史の中で度重なる試練を経験してきました。400 年以上にも及ぶエジプトでの奴隷生活、アッシリアとバビロニアによる侵略と強制移住・強制労働。更には、紀元前４世紀以降に起きた一連の出来事があります。ギリシャのアレクサンダー大王による強制的なヘレニズム化、シリアによる宗教の大冒瀆と大虐殺、そしてついには巨大化したローマ帝国の支配下に置かれるに至ります。イスラエル人は神様との約束事を何度も破り、その当然の報いとして国家の滅亡と外国への離散という結果を身に招きました。しかし、そうであったとしても、こんなにも絶え間なく迫害を受け続ける民族は世界のどこを見ても存在しないでしょう。搾取と汚辱にまみれた民族史と言えます。彼らがその苦悩の中で救い主を待ち望んだのは、むしろ当然のことでした。その待望は、彼らが幻想の中で考え出したものというわけではありません。旧約聖書の中で約束されていた救い主（メシヤ）の訪れを彼らは信じ続けていたのです。その「メシヤ観」（どういう救い主なのかの理解）は時代とともに移り変わっていきましたが、いつの日にか自分たちを苦しみから解放してくださる方が神の許から送られるという約束を信じる信仰は失われることがありませんでした。

「**主よ疾く来りて**」とは、「主よ、早く来てください」。「**御民の縄目を解き放ち給え**」とは、イスラエル民族にとっては「民族的な解放」を求める祈りでした。しかし、神のご計画はもっと巨大なスケールを持つものだった。その救いのご計画は人類全体を罪の縄目から解放するというもの。そのために神の御子が世に送られようとしていたのです。

> **ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。**（イザヤ9:6-7）

１節を歌いましょう。

２.
朝(あした)の星なる　主よ疾く来りて
小暗きこの世に　御光を給え
主よ主よ　御民を　救わせ給えや

「**朝(あした)の星**」とは「明けの明星」を意味します。これは、暗い世界を照らす一人の人物が現れることを象徴する表現です。人類史の初めから、この世界は悪魔の支配下に置かれてきた。闇はいよいよ深まってきていた。イスラエル民族の苦難はこの世の闇を象徴していました。戦は後を絶たず、強い者が弱い者から搾り取り、人権は奪われ、裁判は歪められ、ある者は貧困に苦しみ、その一方では悪いことをして繁栄する人々がいる。環境汚染は時代を追うごとに進んでいく。「**小暗きこの世**」とは、神の支配が見えない世界を指しているでしょう。「神がおられるなら、なぜこんなにひどいことが起きるのだ」。いつの時代にも聞こえてくる問いです。この難解な問いに明確な答えを与えられる人はいないのかもしれません。

しかし、神は確かにこの世界に光をもたらすため、御子を遣わされました。闇が支配する世に、真理の光が訪れたのです。この方は、人の欲によって生まれたのではなく、その人格には一点の陰りもなく、「恵みとまこと」に満ちていました。神が人となり、すべての神の性質を持った方が一人の人間として地上で生きられたのです。それが、イエス・キリストの生涯であります。

> **初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。**（ヨハネ1:1-5）

２節を歌いましょう。

３.

ダビデの裔なる　主よ疾く来りて
平和の花咲く　国を建て給え
主よ主よ　御民を　救わせ給えや

待望のメシヤは「**ダビデの裔**」としてお生まれになると約束されていました。「ダビデの裔」とは、イスラエルの模範的な王ダビデの子孫としてイエス様がお生まれになるということです。この約束は、古くイスラエル民族の形成の時から既に与えられていました。族長ヤコブの四男ユダの家系から王権が離れることがないという預言があったのです。

> **王権はユダを離れず、統治者の杖はその足の間を離れることはない。**（創世 49:10）

また、ユダの家系から生まれたダビデ自身にも次のような約束が与えられています。

> **あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。**
>
> （Ⅱサムエル7:12-13）

このユダ――ダビデの家系より、「平和の国」を打ち立てる一人の王が誕生すると約束されていたのです。確かにイエス・キリストはこのダビデの子孫としてお生まれになりました。

> **ヤコブにマリヤの夫ヨセフが生まれた。キリストと呼ばれるイエスはこのマリヤからお生まれになった。それで、アブラハムからダビデまでの代が全部で十四代、ダビデからバビロン移住までが十四代、バビロン移住からキリストまでが十四代になる。**（マタイ1:16-17）

キリストが打ち立てる「平和の国」とは、軍事力や経済力によるものではなく、神と人／人と人／人と被造世界を和解へと導く「神の国の平和」によるものでした。

３節を歌いましょう。

４.

力の君なる　主よ疾く来りて
輝く御座(みくだ)に　永遠(とわ)に即(つ)き給え
主よ主よ　御民を　救わせ給えや

ここでキリストは「**力の君**」と呼ばれています。この方は本来、創造主なる神、王の王、主の主であります。イエス様は地上の生涯において、嵐を鎮め、病を癒し、悪霊を追い出し、死人を甦らせました。まさしく「**力ある神**」として活動されたのです。

しかしながら、この方は同時に神としてのあり方を固持することをせず、むしろ誰よりもへりくだり、多くの人の病を担って十字架で死なれました。ここで言う「病」とは、人間を根本から病ませている「罪」です。神と人との関係を決定的に断絶してきたこの「妨げの岩」を打ち砕くため、自らのからだを十字架上で切り裂かれたのです。

> **キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。**（ピリピ2:6-8）

教会で唱える「使徒信条」には、キリストが「陰府に下った」という表現が出てきます。これは、死とは無縁の神が、一人の人間として死に、罪を持つすべての人が行かなくてはならない死の世界にまで、立場を同じくして下ってくださったことを意味します。キリストの死は、普通の人間の死とは違いました。寿命や病気で死んだのではなく、自ら選び取った冤罪死、罪を知らない方が多くの人の罪を担って死ぬという道であります。この徹底的なへりくだりは、愛そのものである神にしかできないことでありました。

> **それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。**（ピリピ2:9-11）

十字架の死を選び取ったキリストは、父なる神様によって甦らされ、「神の国の王」として即位されました。それが「**輝く御座に永遠に即き給え**」の意味するところです。

４節を歌いましょう。

私たちはクリスマスの度ごとにキリストの誕生を思い起こし、お祝いしますが、この方が何を成し遂げるために世に来られたのかをいつも再確認しています。それは、私たちのすべての罪が赦されるためでありました。また、キリストは私たちが歩んできた人生の意味を変えることがおできになります。誰もが傷つき、苦しむ経験をしているでしょう。しかし、キリストと出会うことによって、そのすべての経験から花が咲き始めるのを私たちは見るようになります。そして、私たちの心にまことの慰めが与えられていくのです。クリスマスとは、私たちの心に救い主が来られたことを喜ぶ時であります。

【祈り】

ダビデの裔として世に来られたイエス様。人は誰もが心に闇を抱えています。光が要らない人は一人もいません。慰めを必要としています。今日、聖書のメッセージを聞いてくださった一人びとりが、救い主の到来を知ることができるよう、その心に救いを受け取ることができるように、導いてください。暗澹たる世の現実がありますが、この世界を希望の光で輝かせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
イスラエル史に象徴される「闇の世」に、光の訪れを約束し給うた、父なる神の愛、
人の心に「罪の赦し」を与え、神との新しい関係へと導き給う、主イエス・キリストの恵み、
人生の負と思われる経験さえも、すべてを光へと造り変え給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。